

ローマ、ビジョンを確立する - 第十五号

最後の試練：獣の像をめぐる預言的論争への目覚め

Jeff Pippenger

2024-09-03

私たちは今、「獣の像」の試練期にあり、アドベント主義の歴史における最初の預言的論争が再び繰り返されている。2023年7月、大天使ミカエルが降臨し、ソドムとエジプトというあの大いなる都の大通りに打ち殺されて横たわっていたエゼキエルの干からびた死骨を目覚めさせた。そこでは、黙示録11章において、彼らは御霊の賦与によって死の眠りから呼び起こされる。エゼキエル書37章では、死んだ干からびた骨、すなわちイスラエルの全家とされる者たちを主の軍勢へと変えるメッセージが、四つの風のメッセージとして特定されている。預言者ダニエルは、ヨハネの二人の打ち殺された証人を表しており、また、干からびた死骨の谷にいる者たちや、たとえ話の賢い乙女たちも表している。

ミラー派がそのたとえ話を成就したとき、彼らは自分たちの経験がそのたとえ話に表されていることを認識した。十四万四千人もまた、自分たちが遅延の時期にいたことを認識する必要がある。ダニエル書9章のダニエルのように、彼らはレビ記26章の七つの時によって表されているとおり、敵の地に散らされてきたことを認識し、さらにネブカドネツアルの秘密の獣の像を理解する必要がある。

これらの各箇所それぞれにおいて、神の言葉からの預言的な試練が表されています。通りで死んでいる二人の証人は、よみがえらされるときに霊に満たされます。エゼキエルの死んだ骨々は、預言的なメッセージを聞く必要がありました。ダニエルはモーセとエレミヤの著作を研究しているときに、自分が散らされている状態に気づかされました。第二章では、ダニエルと三人の友は、自分たちが死刑令の下に置かれているという事実には比喩的に目覚めさせられ、そして、いったん隠されその後封印が解かれた預言の光がダニエルとその三人の友を救いました。たとえ話の乙女たちは、真夜中の「叫び」によって目を覚まします。キリストが図表の数字からその手を取り除かれたとき、ミラー派は目を覚ました。六つすべての証言において、死んでいる者や眠っている者を目覚めさせるのは預言的なメッセージです。そしてそれは次に試しを生み出し、その試しの過程の終わりには二つの階級が明らかにされます。

これらの記述に基づけば、終わりの日に十四万四千人が目覚めるとき、それはエゼキエルの四方の風のメッセージであり、レビ記26章におけるモーセの七たびの散らしのメッセージである。これは大天使ミカエルがもたらす復活のメッセージである。これはネブカドネザルの獣の像の秘密の夢に関するメッセージである。

乙女たちは油を持っているかどうかによって試され、その油は「神の霊からのメッセージ」とされている。ミラー派の人々は、神の預言のことばの中に自分たちが描かれていると悟り、さらに、最初に1843年を予告する根拠となった同じ証拠が実際には1844年10月2日を指し示していたと分かったときに、目を覚ました。これらの論拠に基づけば、終わりの日に十四万四千人が目覚めるとき、礼拝者を二つの階級に分ける人々を試す預言

的なメッセージによって目覚めさせられる、と結論づけられる。

これらすべての預言の筋道は、獣に対する像、すなわち獣の像の形成によって表される預言的試験の期間において、完全かつ最終的な成就を見る。その試みは、日曜法において乙女たちに対する恩恵期間が閉じるときに終わる。ゆえに、封印が解かれたメッセージを理解した者が誰であることを明らかにする試験として繰り返し表される獣の像の試験過程は、これらすべての預言の筋道によって表現されている。ダニエル書十二章では、知識の増加を悟る賢い者たちは、「清められ、白くされ、練られる」と表される三段階の試験過程を経る。その三段階は、聖霊によってもたらされる確信の段階であり、罪、義、そして裁きの確信を表す。その三段階は、外庭、聖所、至聖所である。その三段階は、黙示録十四章の三天使にも、ダニエル書一章におけるダニエルと三人の友の経験にも表されている。そこで彼らは、まず食事に関する試験に合格し、次に視覚に関する試験に合格し、最後に、北の王を表すネブカドネツアルによって与えられた第三の試験に合格した。

この四人の若者には、神があらゆる学問と知恵に関する知識と才能をお与えになり、ダニエルには、あらゆる幻と夢を理解する力が与えられた。やがて、王が彼らを召し出すよう定めていた日々の終わりに、宦官の長は彼らをネブカドネツアルの前に連れて行った。王は彼らと語り合ったが、彼らの中でダニエル、ハナニヤ、ミシャエル、アザリヤに並ぶ者は一人も見いだされなかった。ゆえに彼らは王の前に立った。王が彼らに尋ねた知恵と理解に関するあらゆる事柄において、彼は、国中にいるすべての呪術師や占星術師よりも彼らが十倍まさっていることを見いだした。ダニエル書 1:17-20。

ダニエルと三人の勇士に対する三つの試練の最後はネブカドネツアルが行った試練であり、したがって、ダニエルと三人の勇士が型として示す最後の預言的試練がバビロンに関するものであることを表している。というのも、ネブカドネツアルは王であり、イザヤ書7章8-9節では、王、国の首都、そして「頭」が相互に置き換え可能な象徴であることが確立されているからである。「頭」とは、終わりの時代の現代バビロンの頭を表している。その終わりの時代の「頭」とは、黙示録17章の淫婦であり、その額には「奥義、大バビロン、淫婦どもの母、また地の忌むべきものどもの母」と記されている。

十四万四千人の最後の預言的試練は、終末における現代バビロンの「頭」についての正しい理解か誤った理解かに関わっている。彼らの最後の試練にはまた、現代バビロンと現代ローマが相互に入れ替え可能な象徴であることを理解することも含まれており、したがって現代バビロンの「頭」は、どちらの系においても同じ「頭」である。なぜなら、それらは入れ替え可能な象徴だからである。

「世界は嵐と戦争と不和に満ちている。だが、人々は一つの頭-すなわち教皇権-のもとに結束し、神の証人において現される神に敵対する。」『証言』第7巻、182。

ダニエルと三人の勇士は、最終的な予言の試練-それは常に予言に対する試練である-がローマという主題をめぐる試練であることを示している。なぜなら、終わりの時代の頭は教皇権であり、それはバビロンの最初の頭であるネブカドネツアルによって型どられており、彼はダニエルと三人の勇士を自ら試したからである。ダニエルと三人の勇士によって型示されたその論争は、主の御手によって導かれ、改変してはならないとされた1843

年の図表に示されているように、アドベンチズムの基礎的歴史における最初の論争によっても前もって示されている。1843年の図表に表されたその論争は、ダニエル書11章14節において幻を確立した勢力を、アンティオコス・エピファネスと見るのか、あるいは異教ローマと見るのかという識別に基づいていた。

終末の歴史において、十四万四千人はその預言的理解について試される。預言的理解は、最終の試練が本質的に預言的な性格を持つことを支える複数の預言の系列によって確立される。その試練は段階的に進み、二つの階級の礼拝者の出現をもって結末に至る。

ダニエル書12章に示されているように、新しい預言的な光の封印が解かれるときに試みが始まり、第一の試みはそのメッセージを食べるか、それとも退けるかである。その試みはダニエルによって「清められる」と表現され、次の試みは「白くされる」と呼ばれ、そしてその過程は第三にして最後の試み「試される」で終わる。第三にして最後の試みとは、二つの階級が「試される」場であり、そこで彼らが油を持っているかどうかは明らかになる。

ダニエル書1章は最後の試練を直接示しており、したがってダニエルは、「獣の像の形成」として表される、その「神の民が乗り越えなければならない試練」を、彼らが「封印される」前にも、また間もなく来る日曜法において「恩恵期間が閉じられる」前にも、指し示している。

獣の像がどのように形成されるかを見極める試金石は、三者連合の預言的構造を理解するという預言的な試金石である。竜、獣、偽預言者には、数多くの預言的証言に基づいて確立された特定の預言的構造がある。終わりの時代に、この三者連合がいかに一つの預言的勢力として結集するのかを理解することは、獣の像がどのように形成されるのかを理解することにほかならない。

終わりの時代において獣の像がいかに形成されるかを理解することの重要性を示す、単純でありながら複雑な例証は、第二テサロニケ第2章におけるパウロの「罪の人」に関する証言である。パウロは異教ローマと教皇ローマの預言的関係を取り上げており、その際、彼は「異教ローマと教皇ローマの預言的関係」が、礼拝者を二つの階級に顕わにする主題であることを指摘している。

「異教ローマと教皇ローマの預言的関係」という真理を愛する一派と、その真理を愛さず、そのために強い惑わしを受けるもう一派がある。パウロが示した異教ローマと教皇ローマの預言的関係は、その二つの権力の関係、さらにその二つの権力とアメリカ合衆国との関係を表す多くの預言的箇所のうちの一つにすぎない。

異教ローマは竜であり、教皇ローマは獣であり、アメリカ合衆国は偽預言者である。アハブは十人の王の上に立つ竜の王で、娼婦イゼベルと結婚しており、彼女は二つから成る偽預言者の集団を支配している。男性の預言者たちはバアルの預言者であり、木立の祭司たちは女神アシュタロテを象徴していた。彼らは共に、女性の祭司と男性の預言者によって表される、獣の像を形作る終わりの日の偽預言者を典型づけている。

竜はアハブであり、彼は黙示録17章の十人の王の象徴で、八つの王国のうち第七の王国である。第六の王国はアメリカ合衆国、すなわちイゼベルの偽預言者たちである。第七の

王国は十人の王、国際連合、竜の力であり、そして第八の王国は、七つのうちのものであって、致命的な傷を受けた第五の王国であり、それがよみがえって第八にして最後の王国、すなわち獣となる。アメリカ合衆国は、この獣にささげ、かつこの獣をかたどった像を造り、その後には全世界も同じことをする。

ダニエル書第1章は、神の言葉において表されているローマを理解することを伴う、最後の預言的な試練を示している。テサロニケ人への第二の手紙は、その最後の預言的試練が、異教ローマと教皇ローマの間の預言的・政治的關係によって表される現代のローマの構造に関する光を含むことを示している。

ダニエル書2章は、終わりの日に封印が解かれて十四万四千人を試す奥義があることを示している。なぜなら、2章のダニエルと三人の勇士は、神の終末の民を表しているからである。封印が解かれ、彼らを試すこの預言的な奥義とは、ネブカドネザルの獣たちの像に関する秘められた夢であり、こうして十四万四千人にとっての最後の試練、すなわちホワイト姉妹が記している「獣の像の形成」を表している。

ダニエル書第二章に表されている試練は、死の脅しの下に置かれている。終わりの時の例証として、それは、真理を愛さない者たちに臨む強い惑わしをパウロが教えたことを裏づけている。ダニエル書の物語では、ダニエルの理解がバビロンの賢者たちを救ったが、終わりの時の最後の試練の後には猶予はない。

私たちが確認してきた、象徴としてのローマをめぐる論争のあらゆる側面は、今進行している論争への直接の証しとなっている。日曜立法のための運動は今、闇の中で進んでいるが、神の預言の言葉はその接近を示している。ところが、昼の子である魂はごくわずかで、昼の子でない者たちは、そのため、猶予期間の砂が急速に落ちつつあることに気づいていない。これは、シスター・ホワイトが示した、最終の動きは急速になるというその文脈の中で起こっている。2023年7月、ミカエルがご自分の強大な軍勢を立ち上がらせるために降りて来た。しかし、その軍の一員となるためには、まず成し遂げられなければならない預言的な働きがあり、それは、獣の像が形作られつつある政治的環境の中で成し遂げられる。

成し遂げられなければならない預言的な働きには、獣の像の形成を認識することが含まれる。預言を学ぶ者は、現代の歴史の中で起きている出来事によって、米国において獣の像を生み出す宗教的・政治的要因が進行中であることを認識しなければならない。また、神の御言葉に示されているとおり、獣の像がどのように預言的に形成されるのかを認識しなければならない。さらに、米国で獣の像が形成されつつあるのと同時に、十四万四千人のうちに神のかたちが形作られていることも認識しなければならない。終末の歴史が、ミラ一派の歴史における真夜中の叫びのメッセージの展開期、すなわち彼らが自分たちがたとえ話の「遅れの時」にいること、ゆえに自分たちこそがその乙女たちであることに目覚めた時と並行していることを理解しなければならない。これら三つの要素は、2023年7月に展開し始めた預言的な試練の一部である。

『行に行を』というとおり、アドベントの歴史において生じたローマをめぐるそれぞれの論争は、終わりの日に繰り返される聖なる歴史であった。ローマをめぐる最後の論争は、2023年7月に到来したメッセージによって目覚めることを神の民が拒んだことの直接の

結果である。

神はご自分の民を目覚めさせられる。ほかの手段が功を奏さないなら、異端が彼らの間に入り込み、それが彼らをふるいにかけて、もみ殻と麦とを選り分けるだろう。主は、ご自分の御言葉を信じるすべての者に、眠りから目を覚ますよう呼びかけておられる。今この時にふさわしい尊い光が与えられている。それは、私たちの目前に迫っている危険を示す聖書の真理である。この光は、聖書を熱心に研究し、私たちが取っている立場を最も厳密に吟味することへと私たちを導くべきである。神は、祈りと断食をもって、真理のあらゆる側面と立場を、徹底して忍耐強く探求することを望んでおられる。信じる者たちは、真理とは何かに関する憶測や漠然とした考えに安住してはならない。彼らの信仰は、試練の時が来て、その信仰について答えるために評議会の前に引き出されるとき、彼らの内にある希望について、柔和と畏れをもって理由を述べることができるよう、神の御言葉の上に堅く据えられていなければならない。

働きかけ、働きかけ、働きかけよ。私たちが世に示す主題は、私たち自身にとって生きた現実でなければならない。私たちが信仰の根本教義と見なす教理を擁護するにあたっては、完全に健全と言えないような議論を決して用いてはならない。そうした議論は反対者の口を封じることではできるかもしれないが、真理を尊ぶものではない。私たちは、反対者を黙らせるだけでなく、最も厳密で徹底した吟味にも耐える健全な論証を提示すべきである。論争家として身を磨いてきた者には、神の言葉を公正に扱わなくなる大きな危険がある。反対者に対するとき、単に信者に確信を与えることを求めるのではなく、その人の心に確信を呼び覚ますような仕方でも主題を提示することこそ、私たちの真剣な努力であるべきだ。

「人間がいかに知性において進歩しようとも、より大いなる光を得るために聖書を徹底的かつ絶えず探求する必要はないなどと、一瞬たりとも考えてはならない。私たちは民として、それぞれが預言の学徒となるように召されている。神が私たちにお示しになるいかなる一筋の光も識別できるよう、熱心に見張っていなければならない。私たちは真理の最初のかすかなきらめきをとらえるべきであり、祈り深い学びを通して、いっそう明るい光を得て、それを他の人々の前に示すことができる。」『証言』第5巻、708。

ミラーの時代のプロテスタントは文法規則に従うことを拒み、第14節の「also」という語を無視する道を選んだ。その語は文法的に、「あなたの民を略奪する者たち」が、第14節が置かれている箇所（第13節）の諸節で表されている出来事の流れに新たに導入される権力を表していることを示している。ユライア・スミスもまったく同じことをした。彼は、第36節の「北の王」およびその後の第40節の「北の王」が、第31節以来主題となってきた「北の王」と同一でなければならないことを証明する文法上の証拠を無視したのである。

今日、アメリカ合衆国こそ「強盗」であると教える人々は、ホワイト姉妹が終末の時代の二つの主要な迫害勢力として教皇権とアメリカ合衆国を特定している一節を持ち出し、そこで彼女がヨーロッパを指すために用いる「旧世界」という語が、実は過去の歴史を表しているのだと主張するために文法をねじ曲げる。ところが、その一節の文法はこの仮定が誤りであることを示しており、また、ホワイト姉妹がその箇所で「旧世界」という語を用いる仕方は、彼女の他の著作での用法とも一致している。彼女がそのように用い

るとき、それは「新世界」との対比で「旧世界」という表現を用い、ヨーロッパとアメリカ大陸を区別する歴史家たちの用法とも一致している。

「旧世界のローマ・カトリック主義と新世界の背教的プロテスタント主義は、神のすべての戒めを重んじる者たちに対して、同様の方針をとるだろう。」『大いなる論争』615頁。

文法的に、「will pursue」という表現は、「旧世界」と「新世界」を表す両方の権力が、終わりの時に神の民に対する迫害を共に遂行することを示している。したがって、この文が「旧世界」は過去の歴史、「新世界」は終わりの時を指すのだと主張するのは、文法上の誤りである。「行に行を重ね」、ローマの古いあらゆる論争は、終わりの時における預言を学ぶ者に、彼らが目覚めるとき、獣の像の試練には「あなたの民の略奪者」を正しく特定することが明らかにされる環境が含まれるのだと教えている。「略奪者」の正しい理解は1843年のパイオニア図表に示されており、ゆえにそれは基礎的な真理であり、預言の霊の権威によって確認された。これは、預言を学ぶ者たちが最終の試練に目覚めるとき、「略奪者」という主題もまた、基礎的な真理と預言の霊に対する最後の攻撃を表すことを示している。

これらの考察は次回の記事で続けます。